

## 出征風景

大川市 平島 初男

前年には日華事変が勃発するなど、戦雲ただならぬ昭和13年12月10日に現役兵として入隊することになっていた私は、その4日前に父親を亡くした。

既に母親も失なっていたひとりっ子の私は、慌ただしく葬式を済ませ、久留米の家を整理して田舎の伯父の許から出征という、悲壮で息づまるような数日を送らねばならなかった。父は、私のため後顧の憂いを絶って死期を早めたのではないかと思うと、やさしかっただけにその心情が哀れでならない。

さりげなくわが出征を告げしとき 病み重き父がかそか頷く

入隊先は久留米の歩兵第48連隊留守隊で、ここにいたのは僅か3日間だけで、早くも12月13日には本隊があるソ連満州国境に向って出発した。驚いたことに営門を一步出ると、そこには寒い夜明け前にも拘わらず大勢の人達が提灯と小旗をもって待っていたのである。私どもの隊列に向って、「万歳、万歳」と叫ぶのを聞くと、出征の悲壮感が全身に漲ってくるのを禁じ得なかった。

国分町の営所より国鉄久留米駅までの長い道のりに、殆んど切れ目のない見送りの人波があった。行軍の中ほどに私が今まで勤めていた銀行があり、その前を通るとき群衆にまじって上司や同僚の顔が見え、口々に激励の言葉をかけてくれた。なかでも若い女子職員が次々に握手を求めてきたのは望外のよろこびであり、感激であった。男女交際が殊更にやかましかった当時の銀行で、白昼堂々と握手ができるのは出征兵士なればこそであった。久留米駅から汽車で門司港に向うことになっていたが、汽車が出るまで駅頭は日の丸の小旗を持った人々で埋まり、女学生の鼓笛隊の音楽が高鳴り、何とも名状しがたい雰囲気包まれた。

やがて私共の汽車が汽笛を響かせて動きはじめたとき、ホームに見送りにきていた新婚らしい女性が夫らしい兵士に手を挙げて、何かを叫びながらいつまでもいつまでも追ってくるのを見て、痛ましい気持ちになったことを覚えている。

汽車の別れよりもっと切ないのは船の別れであろう。

乗り込んだ輸送船が発つ門司港の埠頭は、市民の熱烈な歓呼の声と鼓笛の音で耳を聳するばかりであった。当時『出征兵士を送る歌』というのがある、次のような歌詞がある。

わが大君に 召されたる

生命はえある朝ぼらけ

たたえて送る 一億の

歓呼は高く 天を衝く

いざ征け つわもの 日本男子

こう持ち上げられたら男子たるもの意気に感ぜざるべけんやである。しかしながら船が汽笛を鳴らしながら岸壁を遠ざかって行くときは、今まで陽気に騒いでいた戦友達もしゅんとなっ

て黙りこんでしまった。

いのちに恵まれた私は、この後2回門司港から出征することになる。第2回目は昭和15年の7月で、満州から一旦帰国したものの僅か20日間でこんどは中国南部へ渡るときである。第3回目は昭和17年の3月で、中国南部の部隊から小倉の連隊へ初年兵の受領に来て帰隊するときである。

戦局はいよいよ厳しさを加え、銃後の人々の歓送も一段と盛大となったが、門司港を出航するたび、こんどが最後だろうとの思いを繰返したものである。以上、出征風景を綴ったついでに帰還風景を書き足してみることにする。

出征軍人の最大の願望は、戦争は勝利に終って祖国に帰還し、国民の歓呼に迎えられることであるが、こと志と違って敗戦の憂き目を見ることになった。昭和20年8月15日の終戦は中国南部のバイヤス湾近くで知らされ、その後は武装解除を受けるやら、街川の掃除をさせられるなど、俘虜の屈辱に耐えながらひたすら帰国の日を待ち望んだ。

やっと念願が叶って復員船に乗込むことができたのは翌年の4月13日であった。しかし俘虜のときと同様にこの船の給食もひどいもので、体力を消耗せぬようにじっと寝ているよりほかなかった。

4月21日横須賀港に入港、いざ上陸をと勇み立ったが、不運にも前に入港した船団にコレラが発生していたため船内に留め置かれた。そのうちわが部隊にも感染者が出るなどしててんやわんやの騒動となり、いらいらした気分が充満した。このコレラも1か月以上たってようやく終息したので、5月29日部隊の解散式が行われ、各人それぞれの故郷へ向った。

部隊は解散したが、最後まで各人の帰郷を見届けるため、私は福岡県出身者193名を最寄りの駅で下車させる責任を負わされ、九州へ下る国鉄に乗車した。関門トンネルをくぐると、つぎつぎに下車駅に降り立つ戦友と手を振って別れた。夕日が落ちる頃、私の下車駅久留米に着いた。一人で降り立つと、長い集団生活からの解放感と共に孤独感を禁じ得なかった。

駅頭に出て見渡すと、出征のときの賑やかな久留米の街は瓦礫の原と化していた。一望千里とはこのことか、ぼつりぼつりと銀行やデパートの建物が残っているだけで、あとは平たく均らされて、遠くまで見渡すことができた。栄養失調の体に背負袋1つを負って、西鉄駅まで昔あった店などを思い出しながら歩いて行った。

駅に着いたが時間の都合でか電車は動いていない。ままよとばかりに駐まっていた電車に乗り込み、座席に長く延びて熟睡した。翌朝の始発で安武駅着。それからしばらく野道を歩いて、出征したときの懐かしい伯父の家に辿りついた。

かくして、20才から28才までの私の青春まっただ中を埋めた軍隊生活は、終りを告げた。考え方によっては、徒労だったと言えなくもないが、妙に悔いは残っていない。

次の2首は、戦後50年を経た今の感想である。

いくさ敗れ還りきたりし古里に 波乱の50年生き来て寂か  
もたらせし何かは知らず海越えて 国護らむと燃えし日を恋ふ